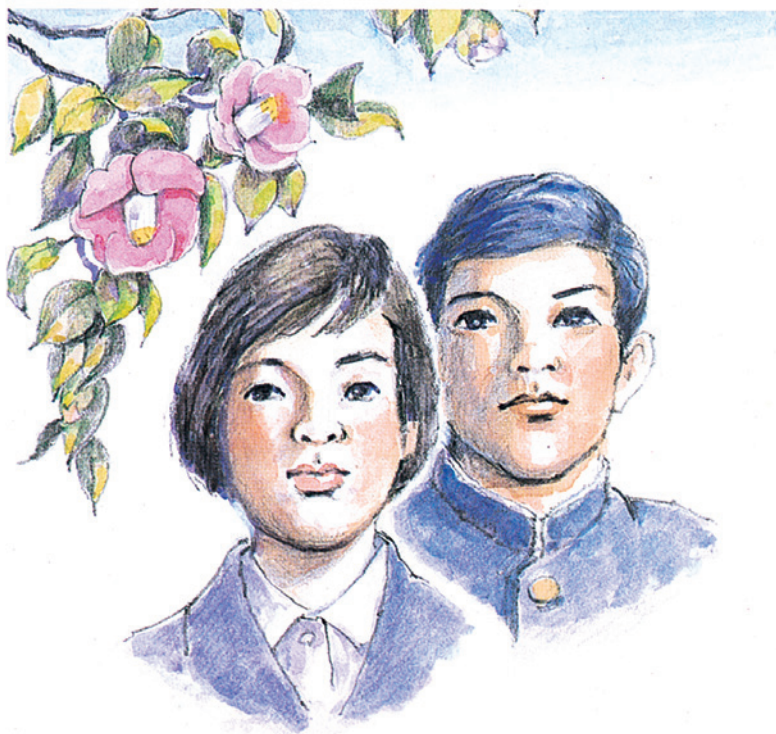


ともだち

令和5年度
中学生人権作文集



広島法務局呉支局
呉人権擁護委員協議会

すべての人間は、生れながらにして自由であり、
かつ、尊厳と権利とについて平等である。

人間は、理性と良心とを授けられており、互いに
同胞の精神をもって行動しなければならない。

——世界人権宣言 第一条——

全国中学生人権作文コンテスト

呉地区大会優秀作品

審査員

中国新聞社 呉支社 社長
呉市教育委員会 学校教育課
江田島市教育委員会 学校教育課
広島法務局 呉支局長
呉人権擁護委員協議会 局長
呉人権擁護委員協議会 人権作文審査委員

古川 竜彦
河野 晴雄
尾上 雄一
中島ひとみ
山城 義明
下田 満
倉田 淳
竹上 和徳
藤田 登喜子
木本 弘
坂手 恵美子
細川 節生

目次

最優秀賞

(県大会 優秀特別賞・サンフレッチエ広島賞)

思いやりのある優しい未来のために…………… 江田島市立能美中学校二年

優秀特別賞

すれ違う視点…………… 呉市立仁方中学校二年

自分らしさ…………… 呉市立阿賀中学校二年

見えづらい差別に目を向けて…………… 呉市立両城中学校三年

かわいい手…………… 呉市立倉橋中学校九年

優秀賞

いじめってどこから? ……………… 呉市立広南中学校一年

言葉のちから…………… 呉市立広南中学校一年

言葉に込めて…………… 呉市立広南中学校三年

第一歩…………… 呉市立白岳中学校三年

尾崎 愛心 …… 1

宮地 柑奈 …… 4

中村 円香 …… 7

長重 佳奈 …… 10

石地彩乃 捺 …… 12

泉 潤 …… 15

河本 悠里 …… 18

大橋 琴子 …… 21

井東日花梨 …… 24

私の挑戦……………	呉市立広中央中学校二年	猪野	真矢	27
誰もが過ごしやすい社会に……………	呉市立郷原中学校三年	堂城	芽唯	29
一人の女の子……………	呉市立横路中学校一年	青本	陽楠	31
「らしく」とは……………	呉市立横路中学校三年	森本	なつみ	33
平和のおりの中の自分……………	呉市立阿賀中学校二年	松本	愛生	36
「自分と人権」……………	呉市立宮原中学校二年	杉田	祐輝	38
一人で悩まないで……………	呉市立昭和中学校三年	塚原	唯	40
多様性について……………	呉市立昭和中学校三年	橋本	亜美	42
言葉の重み……………	呉市立倉橋中学校九年	野田	純	45
“しか”ではなく“も”を目指して……………	江田島市立江田島中学校一年	田口	はるか	48
女性が輝く未来へ……………	江田島市立江田島中学校三年	山下	萌唯	50
私が知らない世界……………	江田島市立能美中学校二年	前田	彩笑	52

思いやりのある優しい未来のために

江田島市立能美中学校二年 尾崎 おぎき 愛心 あみ

「ねえ、まだなんですか？」「えっ？」後ろを振り向いた。不機嫌そうな表情の高齢の男性が、私達の後に立っていた。私と母は、コンビニの自動案内装置の前で慣れないタッチパネルの画面を操作していた。その男性は急いでいたのだろうか。ものすごく険しい表情で、私達をにらみ付けている。母は「ごめんなさい。もう少しで終わりますから。」と謝った。店員さんも心配そうに見に来た。それからやっとの思いで画面操作を終えた母は、男性に深々と頭を下げ「遅くなつてごめんなさい。」と、また謝った。レジで支払いをするときにも、母は店員さんに謝っていた。「ご迷惑をお掛けしました。」私はなぜだか違和感を感じた。なぜ、母はそんなに謝らないといけないのだろう。何も悪い事はしていないのに……。母は毎朝早くから仕事に出掛け、夜遅く帰ってくる。毎日家族のご飯を作り、家の事をして出掛ける。仕事に行けばパソコンや電話、来客対応など忙しいながらも一生懸命にこなして、家に帰ってくる。人は、やり慣れていてあることであれば問題なくこなせる。しかし、初めてのことや、やり慣れていないことをするときには緊張したり、手が震えたり、頭が真っ白になったりもする。母は、慣れないコンビニのタッチパネルの操作方法が分からなかっただけだ。それなのになぜ、あんな言い方をされなくてはならないのだろう。

私は母に聞いた。「何でお母さんがそんなに謝らないといけないの？」「何でかな？でも実際に時間がかかってしまったことは事実だし、迷惑をかけたのも事実。おじさんもずっと待っていたんだと思う

し、忙しかったから、イライラしたんじゃない？ごめんね。嫌な思いをさせて…。」母は悪くない。悪いのは世の中の仕組みだ。分かりやすいように表示はしているけど、途中で失敗すると、また初めからやり直さないといけなかったり、とても不親切だ。母は続けてこう言った。「もし、困っている人がいたら、大丈夫ですか？何かお手伝いできることはありますか？そう言って助けてあげて欲しい。自分より助けを必要としている人が必ずいるから、周りをよく見て、そういう人がいたら迷わず助けてあげなさいね。みんなで支え合って生きているのだから、感謝の気持ちを忘れないようにしないとね。」

コンビニを出ると、駐車場に「車いすマーク」が見えた。障がい者のための国際シンボルマークだ。普通って何だろう。何を基準にして、何が普通なのだろう。「普通が一番難しい。」母はよくこの言葉を口にする。確かに普通は難しい。人それぞれ普通の基準やものさしが違うから。そう考えると自分の体は普通なのだろうか？手足の不自由な人、目や耳の不自由な人、言葉が喋りにくい人は、普通ではないのだろうか？いや、違う。みんな、普通だ。

ただ、人それぞれ得意不得意があって、できるできないがあって、周囲の誰かから何か手助けがあったり、暮らしやすい生活環境や、みんなが住みやすい街になればできることが増える。ただそれだけだ。障がいのあるなしも関係ない。立ち位置はみんな同じ、同じ一人の人間だ。目の色や顔の形、肌の色、国籍が違うように、自分が不得意なことがあるように、体の一部が不自由なだけでできないことがあるだけだ。それを手助けできる人が助ける、暮らしやすい環境を整える、誰かが誰かを支える。そうやってみんなが一人一人を支え合って助けあって行く世の中ができていけば、思いやりのあふれる明るい未来になるのではないだろうか。

障がい者、健常者という区別はない。みんな同じ、できる人ができない人を支える。一見簡単そうに見えるけど、その一歩が難しい、しかし、そうやってみんながみんなを支えて思いやりのある優しい未

来を、私はたとえ自分一人だとしても取り組んで行きたい。そうすることで、いつかみんながそのように考えて行動してくれるようになったらいいなと思う。普段、何げなく生活していると、つい自分のことで精一杯になり、他の人にまで気をまわせなくなる。でも、もしかしたら障がいのある人だけでなく、何かに困って前に進めない人がいるかもしれない。助けを求めていることに私達が気付いていないだけかもしれない。そんなときは、迷わず自分から声を掛けたい。「大丈夫ですか？何かお手伝いできることはありませんか？」と。そして、自分が逆の立場でも、できないことを恥ずかしいと思うのではなく「助けてもらってもいいですか？」と言える勇気を持てる人になりたい。そしていつでも「ありがとう」という言葉を素直に言える人間になりたい。思いやりのある優しい未来を創るために。



すれ違う視点

呉市立仁方中学校二年

宮地 みやぢ

柑奈 かんな

小学五年生の二学期ころから、私は不登校になった。

私はもともと誰とでも仲良くできる性格で、勉強もそこまで苦手ではなかった。しかし、小学三年生のころ、クラスの子たちが私の悪口を言っているのを聞いてしまった。それから私は、人の視線を気にしたり、集まって話している人を見るとこわくなるようになった。

そして、学校にいるのが辛く、体調もくずすようになり、不登校になった。しかし、学校を休んでも体調が完全に治ることはなかった。母は私を心配して病院につれていつてくれた。

結果はうつ病だった。

私は、なぞの体調不良の原因が分かった安心感と同時に少しの絶望感で心がいっぱいになった。きっと母は、もっと絶望感でいっぱいだっただろう。

私の母は元うつ病経験者で、うつ病の辛さをよく理解している。私がつ病になって一番悲しんだのは母だろう。

それから私は薬を飲み、うつ病を治すために少しずつ努力をするようにした。しかし、体がいうことをきかなかつた。私はやるべきことと、できないという事実の間で苦しんだ。

それでも、少しでもできることを増やし、遅れてでも、少しの時間だけでも、学校に行くようにした。

しかし、久しぶりの学校は想像していたよりも冷たく苦しかった。みんなからむけられる視線はとても痛く、私の居場所が教室からきえたような気分になった。教室にいるだけで体調が悪くなる。

そこから私は、学校に行った日はずっと保健室にいるようになった。

六年生になると、中学校のことを考えなければいけなくなった。中学生になると休むのが困難になるので、六年生の内に学校に行けるように親や先生たちが協力してくれた。

私は、ほんの少しずつだけ、学校に、教室に行けるようになっていった。毎日行けるようになったわけではないけれど、最初よりも多く行けるようになった。

そして、卒業が近づいてきた。私は、まだ完全に学校に行けるわけではないから、少し不安だった。そんな私に、母は「中学生になったら、環境が変わって、うつも治るかもよ」と言ってくれた。私はこの言葉ですこし自信をつけることができた。

そして私は中学生になった。うまく学校に行けるようになった。

しかし、また体調をくずすことが多くなり、また不登校になってしまった。私は自分はダメなやつだ、みんなのようにできないと自分を責めた。そんな私を母はずっと「大丈夫、みんなと何もかわらないから、みんなのようにできるよ」となぐさめ続けてくれた。

それから少しずつ学校に行くけれど、みんなからの視線が苦しく、不登校生活にもどってしまった。外から聞こえる中学生の声を聞くと、私も友達といたい、みんなで笑いたいという思いで悲しくなった。

そして、二学期ころ、不登校の人専用の教室ができた。

私は保健室の先生に不登校の人専用の教室に来ないかと言われ、母と見学しにいった。

私にとってはすごくいい条件の場所で、ここに行くことにしたけれど、うれしくなかった。ここに行

くつてことは、もうみんなと同じようにできないと認めることになるから、すごく悲しくなった。けれどこの教室に行くようになってから、学校に行けるようになった。

そして私は、中学二年生になった。今は毎日登校もできるようになってきた。みんなからの視線も気にならなくなってきた。今考えると、みんなからの視線は、不思議に思われていただけなのかもしれない。私も、不登校にならなかつたら、学校に行くのがあたりまえになっていただろう。無意識に他の人を傷つけていたかもしれない。私は、うつ病になってよかつたと思う。

いろいろな人を理解するには、広い心で話し合うことが大切だと思う。偏見で決めつけず、まずは話を聞くことが大事だと、不登校の経験をして気づくことができた。話し合いの中には、自分の中でのふつうが相手にとってのふつうではないことがあるかもしれない。それをわかり合わなければ、視点がすれ違い、わかり合えなくなってしまう。それで傷つく人もできるかもしれない。

私は、人と人がわかり合う大切さを改めて感じることができた。



自分らしさ

呉市立阿賀中学校二年

なかむら
中村

まどか
円香

私は女の子っぽい格好が嫌いだ。だから、スカートを履くことも、髪を長くすることもしない。女の要素になるものは、全て嫌なのだ。

幼稚園の年長のとき、総合生活発表会でオペレッタ（音楽劇）をした。子ども・牛・お母さんを女の子がする役だった。私はお母さん役になりたくなかったけど、背が高い子はその役になった。舞台やひな壇の上で、音楽に合わせて歌ったり踊ったりして楽しかったけど、赤い生地銀のキラキラしたモールのがついているエプロンの衣装が好きではなかったことを覚えている。

小学三年生のときに妹と一緒に撮りに行った「七五三」の写真。着物を着て、髪をお団子にしなければいけなかった。化粧もしなければいけなかった。すべてが嫌で泣きそうになった。写真を撮るときも嫌で嫌で、今すぐ脱いでいつもの自分の姿になりたかった。でも、たまにしか買ってもらえないガムを買ってあげると母に言われ、やる気は起きたものの苦笑い。ガムは特別だったけど、泣きたかった。二歳の「七五三」のときも着物を嫌がり、化粧も嫌がり、お参りしたらすぐに車の中で普段着に着替えたらしい。私は覚えていないけど、確かに写真の私は半べそだ。

小学四年生のとき、祖父のおそう式で仕方なくワンピースを着たのを最後に、スカートは全く履いていない。髪型もショートカットになった。服も男の子コーナーで買うようになった。その結果、外では必ず男の子扱いになった。家族でいると、お店の人や私のことを知らない人からは一〇〇%、「息子さ

ん」「お兄ちゃん」と言われた。母が娘だと伝えると驚かれた。女子ばかりで遊びに行っても、お店の人からは、「僕は？」と聞かれてしまう。たまに学校の先生にも中村君と呼ばれることがあり、最近辞めた塾では、退塾するまで「君」と呼ばれていた。飲食店やスパーなどのトイレに入ると、変な目で見られるようになった。

「ここは女の人のトイレで、男の子はあっちだよ。」そんなことを言われたこともある。だからといって、女の子っぽい格好はしたくない。男の子に見られようと、トイレで変な目で見られようと、絶対にしたくないのだ。

小学六年生のとき、阿賀中学校の女子の制服がスカートしかなく、ズボンがないことを知った。このまま中学一年生になってもズボンがなかったら、中学校には行きたくなかった。私は母に言った。「スカートなら中学校は行かないよ。」でも、ギリギリでズボンでもいいことになって安心した。もし、一年早く生まれていたら、私は不登校になっていたかもしれない。

今、悩んでいるのが高校受験だ。私が自分らしくあるために、高校選びが一番重要なことは制服になる。女子の制服に、ズボンのある高校が増えてきたとニュースで聞いたけど、あまり見かけないし、女子のズボンをホームページにのせている学校がほとんどないので、実態がよく分からない。また、ズボンがあっても、上の服にリボンがついていたり、ピンク系の色が使っているのも嫌だ。私みたいに女の子っぽい服装やかわいい系が苦手な子は、制服がズボンであればいいという訳ではない。女の要素が完全にゼロの制服ではないと嫌なのだ。ちなみに、気になる高校のホームページを何校か確認したけど、私が納得のできる制服の学校は、家から遠いところに一校しかなかった。

多様性や個性を重視する考え方が広がりつつある今、私のような子でも着れる制服を多くの高校で取り入れ、ホームページで紹介して欲しい。今のままでは、行きたくても制服が合わなくて諦めたり、遠

くの高校まで行かなくてはならないのだ。

この世界が不要な悩みなく、誰もが自分らしく歩める環境になると嬉しい。そのために、私はこれからも“自分らしさ”を失わず、ありのままの私を大事にしていきたい。



見えづらい差別に目を向けて

県市立両城中学校三年

長重ながしげ

佳奈かな

「あ、またか。」教室でけんかが起こっては、先生が仲裁に入り、ある特定の生徒がしかられる。そしてそれを見て、周りのクラスメイトからひそひそ声でかわされる怒られている子の悪口。小学生のころ、私はことさらそれが嫌だった。仲直りのために授業の時間が削られていたことや、教室内のよどんだ雰囲気は理由の一つだった、ともちろん言える。しかしそれ以上に私の胸を締めつけていたのは、なぜあの子だけに第三者が見ても分かるほど先生はしかっていたのだろう。なぜあの子だけ悪者だと決めつける雰囲気になっているのだろうかという疑問だった。

一時は、私が進んばよりも敏感なだけであろうと考え、けんかが周りで起こってもできるだけ何も考えないよう努力していた。このけんかは私に一切関係がないし、関係のない私がとやかく文句を言うべきではないと言いつけて。しかし、いつも最後に残っているのは、小さなわだかまりと「○○君だけが本当に悪いのかな」と言い出すことができなかった歯がゆさだった。

しかし、小学校高学年、中学生と学年が上がるにつれ、その違和感は徐々に薄れていった。その原因は、自由度が増したことで大人から社会の正解をはっきり教えられることが減り、理想の大人になるためには、世の中の常識をたくさん知らなければならぬのだと自分なりに考え、他者の意見に受容的になっていくことなのだと思はれていた。しかし本当にそうなのだろうか。こんなもつともらしい理由を考えていても、私の心から違和感がなくなることはなかった。それに加えて自分の意見さえ見失っているような心地がしたのだ。

私は一度立ち止まり、この現実を直視してもう一度考えてみた。そうすると、物事に対して素直になれていない自分があることに少しづつ気がついたのだ。実際は、自分がおかしいと感じていたその気持ちを表したときに、他者から変な子と思われることをおそれていた。他者から褒められる人間になりたいたいという欲も、あだとなったのかもしれない。他者からの評価を気にしすぎるあまりに、自分の意見を言うということをあきらめ続けた結果、他者の意見にのみ込まれていったのだと思う。

そして、それこそが差別につながる種だと私は気づき、人は常識という名の差別をつくり出しているのだと知り、自らの恐ろしさを感じた。

多数派の考えと少数派の考えを比べたときに、人は多数派の意見が正しいと思ってしまう。そして多数派の意見は、雪だるま形式でどんどん巨大化し、いつしかそれが常識となる。もしかすると、その一つや二つは誰かを苦しませる差別であったかもしれない。

このことは、学校という小さなコミュニティであっても社会という大きなコミュニティであっても当てはまると思う。例えば、女の子はピンク色が好き、男の子は青色が好きという一見、当たり前だと思うことも苦しいと感じている人がいるのだ。

あの時、一方的に怒られ、悪いと決めつけられた子はどんなことを思っていたのだろう。自分の意見を聞いてもらえずいらだっていたのか、他者の意見におされるあまりに、自分が悪かったのだろうと納得して自信をなくしていたのか、それとも案外不満を感じていなかったのか、それはその子にしか分からない。けれど、第三者の私から見て公平な目が向けられていなかったと思う。

他者の意見に流され、そしてそれが発端として差別にもなりえることを実感した。誰もが自分らしく生きられる社会を創るために、私は一時捨てかけた敏感さを武器に、見つけづらい差別に目をそらさず闘っていきたい。それが誰かの人権を守ることにつながると思うから。

かわいい手

呉市立倉橋中学校九年

石地いしじ 彩乃捺さりな

私は四人姉妹で、長女のお姉ちゃんは、生まれたときから指が両手で十本なく、片手四本ずつで、形も少し違っています。でも、私は小さいときから一緒なので、それが当たり前前に思っていました。

しかし、他の人の目線はつめたく、保育所や学校ではいじめられていたと聞いて、私はおどろきました。

生まれたときから生まれもった姉ちゃんの手なのに、どうしようもできないのに、何も悪くない姉ちゃんをいじめて何がしたいのか、何を姉ちゃんに求めているのかがわかりませんでした。

それでも姉ちゃんは、いつも笑顔で前向きで、一回も弱音を吐いていないところを約十五年間一緒に生きてきて、見たことがあります。それでも、どこかで悪口を言う人もいました。

姉ちゃんはとても器用です。もともと右ききだったけど、右手でペンを持ったり、はしを持つことができないので、左ききに変えたりもしたそうです。

姉ちゃんが高校生になり、家を出て、おばあちゃん家から高校に通うようになりました。

毎朝、弁当をつくらないといけなくなりました。姉ちゃんは料理が好きなので、左手で包丁を持ち、器用に野菜などを切りました。そして、そのときの彼氏に弁当をつくったり、たくさんのキャラ弁をつくったりしていました。

他の人に何と言われようと、前向きで笑顔の姉ちゃんを尊敬しています。最近流行っているSNSの

ティックトックは、指も使って踊らないといけません。でも、喜んで一緒に撮ってくれました。インスタにも出していいよとも言ってくれます。

姉ちゃんは、仕事にも行っていて、今は障がいの人が通う学校のような所で子どもたちに勉強を教えたり、一緒に遊んだりしています。

指が少ないから、手の形が違うから何もできないのではありません。指が少なくても、手の形が違って、できることはたくさんあるし、可能性もあることがわかりました。

私は、姉ちゃんと同じように体のどこかに障がいをもっている人は、何も悪くないと思います。だから、自分を責めず、難しいことがあれば、人に頼ってほしいと思いました。

そして、私たちが気軽に頼られるような優しい人になれると良いと思います。そして、そのような人が増えるといいなと思いました。

そのために、困っている人がいたらそつと手を差しだし、助け合うことをしていきたいです。

障がいをもっている人が苦しい思いをしないように、みんな平等に生活できるようなそんな世界になつてほしいです。

もし、自分が姉ちゃんのように障がいをもっていたとしたら、心が折れると思います。姉ちゃんのようにずつと笑顔でいられなかつたし、弱音もたくさんはいていたと思います。

それなのに、姉ちゃんはいつも優しくて頼りになり、なんでもできてしまいます。姉ちゃんは本当にすごいです。

だから、生まれもつた大切でかわいい姉ちゃんの手を大切にしたいです。「みんなちがって、みんないい。」という金子みすゞの言葉は、そういうことなんだなと思いました。

私はネイルをすることが好きなので、姉ちゃんの爪をとびつきりかわいくしました。

すると、姉ちゃんは喜んで、インスタの投稿でも、手を映す機会が増えました。私は本当にうれしかったです。

姉ちゃんの手は、世界で一つしかないかわいい手です。



いじめってどこから？

呉市立広南中学校一年

泉 いずみ
潤 じゅん

ぼくはいじめなんてしていない。いじめなんて最低だ。そう思っているけど、笑っている自分があることに気づく。そして、ふと、あのとき、友達は深く傷ついていたのではないか。自分が気づいていないだけのいじめも、たくさんあるのではないか、と思うのだ。

ぼくは妹とささいなことでよくけんかをする。けんかになっても、妹が先に折れないと、妹の容姿についてや、性格など弱点を探してはぶつけてしまうことがある。そうすると、妹もぼくのことについて、同じように悪い点をあげようと必死になる。親には、「やめなさい」といつも口酸っぱく言われる。それでも、ついつい言ってしまう。自分のうつぶんを晴らすかのように、きつい言葉で妹を泣かせ、黙らせようとする。よく考えると、これは、ただのけんかではなく、はっきりとした「いじめ」なのではないかということに気づいた。兄妹だからといって、何でも言っているわけではない。当然、言われると腹が立つし、深く傷つく。兄にひどいことを言われ、妹はどんな気持ちになっただろうか。冷静になつて考えてみると、申し訳ないことをしたなと思う。

では、「けんか」と「いじめ」の境界線とは何だろうか。

「いじめ」は、強い者が弱い者に一方的にやりこめようとする事だと、ぼくは思う。相手が黙り込んで、傷ついたりする姿をみて、面白がつてエスカレートしていくのだから。

「けんか」は、双方が言い合いをするようなイメージがある。考え方のすれ違いや、相手の言動で、

指摘するけど理解されず、けんかに発展してしまう。一方的か、双方かがけんかの違いだと思ふ。

「けんか」は、生きていく上で、仕方のない部分もあるだろう。みんなそれぞれ性格が違うし、考え方も違う。我慢できる人もいれば、抑えきれず、吐き出して衝突する人もいる。でも、「いじめ」は、一方的なものであり、する必要のないことだと思う。自分のストレスを相手におつける間違った解消方法だと思う。

今は、スマートフォンやタブレットが普及し、面と向かって、人と会話することが減ってきていると思う。学校でもニュースでも、スマートフォンやタブレットによる文字からのいじめがあると聞く。言葉は人を温かい気持ちにさせたり、包み込んでくれたりする優しさも持っているのに、簡単に人を傷つけるものに変化するという恐ろしさももっている。さらに、面と向かって言われる言葉と違い、スマートフォンやタブレットで発信された言葉というのは、誰でも簡単に送受信でき、あつという間に拡散され、相手の顔が見えないことをいいことに、どんどん大きくなって広がっていく。一対一ではなく、一対計り知れない数の人という、いじめにつながる。

では、いじめをなくすためにできることは、どんなことだろうか。一つは、普段から、家庭でのコミュニケーションをしっかりととり、自分の思いを言葉にして伝えていくことだと思う。その言葉を、しっかりと受け止めてくれる人がいることも、とても大切なことだ。家族は何があっても、そのような暖かい場所であってほしいと思う。

もし、いじめの現場を見たら、「やめろ」と立ち向かうことは、とても勇気がいるかもしれない。でも、小さなことでも行動に移すことができたなら、状況は変わると思う。直接、いじめをしている人に言えなくても、先生にいじめがあることを伝えたり、いじめられている子の相談に乗ってあげたり、ちよつとでも声をかける勇気を持ちたい。そんなちよつとした自分の行動で、いじめを受けている子の

心が救えるのではないか。

人には「人権」がある。人権とは、「人が人として、社会の中で自由に考え、自由に行動し、幸福に暮らせる権利」で、誰もが生まれながらにして持っているものだ。

その人権を、奪うことは、誰であっても絶対に許されない。常に、自分の言葉に重みと責任を持って過ごしていきたい。



言葉のちから

呉市立広南中学校一年

河本 かわもと

悠里 ゆり

夏休みのある日、部活からの帰り道で、地域のゴミステーションを掃除しているおばさんを見かけた。こんな暑いのに、公共の場をきれいにしてくれているのだな、すごいな、と思った私は、「お掃除をしてくれているのですか。ありがとうございます。」と声をかけた。

「においが気になるからねえ。」と言い、そのおばさんは水をかけたりほうきで掃いたりしていた。私は、「失礼します。」と言って、家に帰った。

後日、祖父が、そのおばさんから話を聞いたと言って、次のように話してくれた。

「悠里がありがとうと言ってくれてうれしかった、と言って、おばさんはとても喜んでいたよ。」私は少し驚いた。お礼を言っただけなのに。手伝うこともしていないのに。どうしてそんなに喜ばれたのだろうか。私がそう考えたのは、友達の行為があったから。

以前、私は友達と三人で学校から帰っていた。その時、駐車場の草抜きをしている人を見て、友達一人が「手伝いましょうか。」と声をかけ、草抜きを手伝い始めた。だがその時の私は、自分も手伝おうという発想すら浮かばず、そばに立って見ていただけだった。ただ、すごいなあと思っただけだった。今思うと少し恥ずかしい。

だから、今回は手伝いたかったのだが、急いでいたため手伝えなかった。友達は手伝っていたのに。今回は手伝いたいと思っていたのに、また手伝えなかった。だからせめてお礼だけでも言おうと思っ

た。それだけだった。手伝っていた友達に比べると、自分は手伝わず、ただお礼を言ったただけなのに、なぜそうも喜ばれるのかと思ってしまう。そこで、少し考えてみた。

もし、掃除をしている地域の方を見かけても、誰も何も言わなかったらどうなっていたのだろうか。その人は、喜ぶことはもちろんなく、また、悲しむこともなかったのではないだろうか。なぜならその人は、誰かに感謝されようと思つて掃除をした訳ではないはずだからだ。感謝されなくて当然と思つていれば、誰かから声をかけられなくても何とも思わないだろう。だからこそ、そのおばさんは、予想外にも感謝の気持ちを伝えられ、期待していなかった分、それだけうれしかったのではないだろうか。

例えば自分の場合、委員の仕事をしていた、誰かに「ありがとう。」と言つてもらえらると、いやいや、仕事だから当然だ、と思うが、やっぱりうれしくもなる。たとえ手伝つてくれなくても。それは、なぜだろうか。

自分のやっていることに対して、誰かが感謝してくれるということは、「自分の行動は役に立っているんだな、間違っていないんだな。」と、確かめることができるからだ。だから、私がおばさんに「ありがとう。」と、言ったことも、きつとおばさんの行為に対して、「役に立っていますよ。」と意味を伝えたことになるのだろう。

おばさんの行為は、おばさんの善意が表れたものだ。おばさんの行為への感謝は、おばさんの気持ちへの感謝とも言える。感謝を伝えるという行為は、その行動を肯定し、ありがたさを感じているという前提の上に成り立っている。その人の気持ちに感謝しているということだ。

誰しも、自分の思いを認めてもらえるのはうれしいはずだ。私はまず、人の善意や思いを認められる人になりたい。おばさんに向けて言った「ありがとう。」という言葉の持つ意味について、言った本人である私がいかに分かっていなかったことに、今回考えてみて気が付いた。人を大切にすること

は、その人の気持ちを大切にすることだと思う。だから、私はまず言葉で人の気持ちを肯定することから始めていきたい。そして、次こそは、何かしてくれている人を見かけたら、自分も手伝うという行動に移していける。そんな人になりたい。



言葉に込めて

呉市立広南中学校三年

おおはし
大橋

ことこ
琴子

言葉には、いろんな種類がある。思いやりのある言葉。ナイフのようにとがった言葉。相手のことを思ってたつつもりが、逆に相手を傷つけてしまっている言葉。

言葉には、いろんな力がある。相手を優しく包み込み、心を優しく包み込む力。相手の心を傷つける力。傷ついた心を癒やす力。

言葉には、いろんな種類があつて、いろんな力があるからこそ、簡単に扱つてはいけなと思う。でも、普段の生活で言葉に気をつけられているかと聞かれると、人前ではつい Yes と答えたくなるが、心がモヤモヤしてしまう。私にとっては、何気ない言葉だったけれど、もしかしたら相手を傷つけてしまったのではないかと思う場面が何度かあるからだ。

例えば、小学生のころ、他学年との交流が少ない方だったので、その出来事に驚いた。三学年ほど歳下の女の子が、いつも私に向かって手を振ってくれるのだ。初めは、自分に対してではないと思つていただけで、周りに誰もいない時にも手を振るので、私に振ってくれたのだと分かった。私は、驚くと同時にうれしかった。しかし、私は疑問に思つた。どうして私なんか手を振ってくれるのだろうか。そこで、何の気なしに聞いた。「どうして手を振るの？」と。しかし、その日から、その子が私に手を振ってくれることはなかった。私はしばらくして、その意味を呑み込んだ。私の言葉の使い方が悪いように捉えられ、その子を傷つけてしまったのだと。その時から私は、声を出す前に、メッセージを送る

前に、もう一度、相手を傷つけるような言葉を使っていないか確認するようにしている。それでもまだ、相手を傷つけそうになることはある。

このように、言葉によって相手を傷つけてしまうこともあるけれど、逆に言葉で相手の心を癒やすこともある。

例えば、嫌なことを言われても、ちゃんと謝ってもらえたらすつきりするし、「頑張つて」と応援してもらえたらうれしくて顔がほころぶ。他にも、「ありがとう」と言えば言う程あたたかい気持ちになる。そんな言葉をたくさん使える人になりたい。

最近では、インターネットやSNSを誰でも使うことができ、誰とでも繋がることができる。

そんな今、ネット上での誹謗中傷やトラブルが原因の不登校や自殺をよく聞く。確かに、きちんとルールを守り、思いやりの心を持ってインターネットを利用して人々もいる。けれど、悪意を持った人たちによるインターネットを通じた人を傷つける言葉もある。

相手の姿が見えないと言いつ過ぎてしまったり、間違つた言葉の受け取り方をしてしまったりする。だからこそ、現実での会話以上に言葉に気をつけるべきなのではないだろうか。

このように言葉の力は計り知れない。

私は言葉にふれながら生活する中で、気をつけなければならぬ二つのことが思い浮かんだ。

一つ目は、言葉を大切に使うことだ。

言葉を自分らしく使い、自分の思いを伝えるための手段として発していくことは、とても大切だ。

しかし、言葉を不自由なく使えることを当たり前と思つてはいけない。一言一言を、大切に大切に、声に出したり、文字を打ち込んだり。そうすることで、想いの込められたあたたかい言葉が生まれ、言葉が誰かを傷つけることがなくなるのではないだろうか。

二つ目は、言葉をしっかりと考えながら使っていくことだ。

言葉について考えることで、自分の気持ちや意見の伝え方もきちんと考えるようになった。すると、自然と相手も自分もあたたかい気持ちになれる言葉を選び、使うようになった。

また、言葉を伝える前に、一度考えることで、相手や自分を守ることができる。そして、自分の伝えたいことを、そのままの形で、相手に伝えることができる。

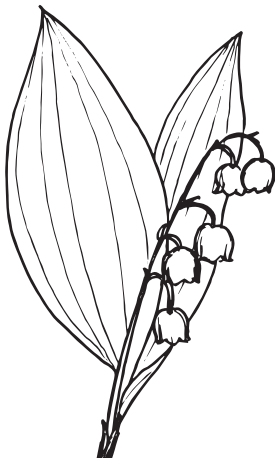
もしも、言葉で苦しんだり、言葉で誰かを傷つけてしまったと悩んだりしたとき。言葉を大切に使うことと、考えながら使っていくこと。この二つこそが、言葉の正しい使い方になると思う。

私は、全ての人が言葉の力を、人を守るために使ってほしいと願っている。また、私自身もそうありたい。

最後に、この作文を読んでくださった人にあたたかい言葉の輪が広がっていきますように。小学生のころの私が伝えられなかった

「ありがとう」

の言葉があなたにも届きますように――。



第一歩

呉市立白岳中学校三年

井東 いとう

日花梨 ひかり

なんで悪い奴と関わらないといけないんだらう？私が「非行や犯罪に走ってしまった人との関わり方」を考えてみたとき、まずそう思いました。しかし、色々と調べているうちに、私の知らない世界が見えてきました。

まず、ノルウェーでは犯罪をしてしまった人への考え方が違っていました。ノルウェーの刑務所には、ビリヤードや卓球、ジムなどの施設があり、通信制高校に通うことができたり、日本では考えられない娯楽や教育の機会がある事に驚きました。そして、そんな機会に対して国民は、刑務所は罰を与える場所ではなく、社会復帰のためのリハビリだということです。犯罪者に対する憎しみよりも優しさを選択するという考え方だそうです。

もし、犯罪者に身近で大切な人を奪われたとします。私だったらどんな風に考えるでしょうか。たまったもんじゃない。どうにかして償ってもらわないと気が済まないと思ってしまう。それとは反対に、ノルウェーの人はなんて素敵な考え方ができるんだらうと拍手したくなりました。

反対に、シンガポールは犯罪にとっても厳しい国だと分かりました。ゴミやタバコのポイ捨て、電車内での飲食、唾を吐くこと、公共の場での泥酔、公共のトイレでの流し忘れ、さらに国内へのガムの持ち込みまでも禁じられており、罰金が発生するそうです。そして、未成年に対しても容赦ありません。比較的軽い犯罪でも実名報道されることが多く、社会的制裁までも厳しいのです。私は、ノルウェーとの

違いに驚きました。犯してしまった罪よりも更生を助けることで治安が守られているノルウェーに対して、犯罪の刑罰を重くすることで美観と秩序を保っているシンガポール。考え方の違いによりここまで差が出るとは、考え方の大切さを改めて感じました。

犯罪の被害を受けた人がいる一方で、犯罪をしてしまった人にも理由があるのです。

私は、その理由が許されるかどうかは別として、確かにそうだと納得します。だから、罪を犯したという事実だけを見てつき放すのは、残念であり、してはいけないと思います。

ですが、やはり罪を犯すことはどうしても悪いイメージとなつて、その人にまとわりつくものです。近づきたくないな、嫌だなと思うのは当たり前ではないでしょうか。たとえ、それが良くないと分かっているつもりでも。

しかし、もし、犯罪の理由が本人だけの問題ではなく、他の要因であるのだとしたら、犯罪者というレッテルで、周りから人がいなくなり、進学や就職がだめになることはとても辛すぎます。現実のむくわれない悲しみや絶望から立ち直れずに、もう一度犯罪、非行に走つてしまう人がいることもあります。ただ、残念なこと一度ついてしまった悪いイメージは、簡単には消えてくれないということも深く心に刻まなければいけません。

最近、私たちと同年代の生徒が店へ盗みに入り、店主へ暴行を加えるという事件がありました。この事件の後、私の中で、その人たちが在学する学校へのイメージはとても悪くなつてしまいました。部活の試合でその学校名を見ると、「うわぁ」と思つてしまうのです。私が出会った人たちが、事件を起こした人と別人であることは分かっているのですが、どうしてもその悪いイメージから抜け出せません。そのようなことがあったので、犯罪の当事者、その人の近い人、そして第三者の立場と偏見について意識するようになりました。

勝手に偏見をもって、人の表面だけを見て避けたりするなんて、もつたいたいと思うようになりました。相手がどんな子でも勇気をもって近づいて、その子の内面まで知ってからどう関わるか決めても遅くありません。人と付き合っていくことに、早くても遅くても関係ないからです。学校で流れるうわさだってそうです。本当のことは本人にしか分かりませんが、たいていうわさは一人歩きしてしまい、多くの人がうわさの方を信じてしまいがちです。

こんな風に、頭では理解しているつもりなのに、いつのまにか偏見をもった目で見てしまっているのが、もつたいたいと考えています。

偏見をもつ人は変えることはできないので、偏見をもたない人は、自分の感想を伝える雰囲気のある社会になれば良いと思います。これに気がついた私は、もの事を対角的にみる努力をしてみたいです。

気づくこと、理解すること、努力することが社会が明るくなる第一歩になるのではないのでしょうか。私も、その一歩に貢献できるようになります。そしていつか、明るく、誰もが笑顔でいられるような社会になることを願っています。



私の挑戦

呉市立広中央中学校二年

猪野^{いの} 真矢^{まや}

皆さんは点字ブロックを見たことはありませんか。おそらく多くの人が一度は目にしたことがあると思います。点字ブロックは、視覚障害者が足裏の触覚で認識できるよう、突起を表面につけたもので、視覚障害者を安全に誘導するために地面に設置されています。

私の曾祖父は、仕事中の事故により両目の視力を失ってしまいました。ある日突然光を失い、一人で外出することができなくなりました。外出の時は、必ず誰かが付き添っていました。しかし、いつまでも人に頼ってばかりではいけないと、杖を持って少しずつ一人で歩くようになりました。目の代わりに、手を研ぎ澄ませながら一歩ずつ前に進みました。昔は今のようには、点字ブロックの設置も少なく、視覚障害者に対する社会的配慮や環境も整っていませんでした。とても苦労したようです。そして、「めくらさん」と言われることもあり、とても辛い思いをしたそうです。今よりも、周りの人々が、障害を持つ人に対して理解が少なかったのだと思います。私は、その話を聞いて胸が苦しくなりました。ある日突然、見えていた世界が真っ暗に閉ざされてしまったらどんなに辛いだろうか。曾祖父の苦労を思うと、いたたまれない思いが込み上げてきました。

しかし、現在の日本では、さまざまな支援が普及しています。点字ブロックや、メロディ信号機などの環境的配慮、そして、盲導犬です。目が不自由な人を助ける重要な役目を担っています。私は、盲導犬の存在を知り、そんな賢い犬がいるなんてと、衝撃を受けました。それから、盲導犬についていろいろ

ると調べました。日本では、主にラブラドルレトリバーという犬種が厳しい訓練を受けています。約六カ月から一年間、盲導犬として求められる作業や社会的マナーの訓練をし、適正と認められた犬だけが盲導犬になることができます。だから、産まれてきた全ての子犬が盲導犬になれるわけではありません。そのため、日本で実働している盲導犬の数は、わずか八百三十六頭です。

しかし、盲導犬を希望している視覚障害者は約四千名と言われています。全く足りていないことがわかります。

私に何ができることがないかと考えた結果、パピーウオーカーというボランティアがあることを知りました。パピーウオーカーとは、生後二カ月から一歳前後までの子犬を家族の一員として迎え、人間と一緒に暮らすことで、人間との信頼関係を育む目的があります。子犬時代に一般家庭でたくさんの愛情を受けて暮らすことは、盲導犬になるためにとっても重要なことなのです。つまり、パピーウオーカーになるということは、私が考えていた以上に重大な責任があることを知りました。

私は家族で何度も話し合いました。産まれてからの一年間、子犬にとつてとても大切な時期を子犬中心の生活で暮らしていけるのか。子犬を迎えるということは、人間の赤ちゃんを育てることと同じくらい目が離せない。子犬の飼育に対し、家族全員で参加することができるのか。また、一年後に子犬との別れを受け入れることができるのかなど、父と母に何度も何度も聞かれました。しかし、私と姉は、やってみないと強い意志を伝えました。

すると、今度、説明会に参加してみようということになりました。私がやろうとしていることは、とても小さなことかもしれないけれど、何かをやってみようと一歩踏み出すことで、誰かの役に立てるなら挑戦してみようと思います。

誰もが過ごしやすい社会に

呉市立郷原中学校三年

堂城どうじょう

芽唯めい

最近、インターネット技術が発達してきています。例えば、ゲームで友達や世界中の人とつながることのできるオンラインゲームや学校でのタブレットを使った授業、チャットGPTなどたくさんあり、インターネットは現代の社会・生活に必要なものになってきていると思います。しかし、インターネット技術の発達も誰もが過ごしやすい社会なのでしょうか。確かにインターネットはとても便利なものではあるけど、メリットとデメリットがあると思います。

私がそう思ったきっかけは、母と一緒にスーパーに買い物に行ったときです。そのスーパーは、お金を払うときだけセルフレジを使う形のスーパーでした。とてもスムーズに買い物ができ、レジにならぶ時間も短縮されるので、とても便利だなと思いました。買った商品を袋に入れていたとき、一人のおじいさんが困っているのが目にとまりました。そのおじいさんは、セルフレジでのお金の払い方が分からず、どうしようと困っていました。午後二時だったので、お客さんも少なくレジにいた店員さんは、次のお客さんを待ちながら、チラチラおじいさんのことを見ていました。なんで助けてあげないのだろうか、と私は思いました。私は声をかけようか迷っている間に、おじいさんが店員さんに「すみません。どうやっていいですか。」と声をかけていました。私は安心し、様子を見ていると店員さんは、めんどくさそうに対応していました。その様子を見て私は、モヤモヤした気持ちと同時に小さな怒りがこみ上げてきました。そのおじいさんは、耳が聞こえにくい人で、何度も店員さんに聞き直

していました。店員さんの声が、どんどん大きく怒ったような声へ変わっていききました。おじいさんは申し訳なさそうに「すみませんねえ。耳が聞こえにくいんですよ。」と言いました。私は、おじいさんは何も悪くないのに、なぜおじいさんが店員さんに謝らなければならないのだらうと思ひ、モヤモヤした気持ちのままスーパーを出ました。家に帰る間の車の中でもモヤモヤした気持ちは消えないままでした。

このような体験から私は、セルフレジとは別に有人レジをつくったり、セルフレジには使い方を書いた紙をレジの近くに貼るなど、高齢者だけでなく、すべての人が使いやすくなるよう工夫することが大切だと思います。

このように、情報社会が進んでいくことで困難は増えていくと思います。例えば、飲食店で料理を注文するとき、タッチパネルでの注文でやり方が分からない人が出てきたり、高齢者への詐欺の高度化、個人情報の流出などです。こういった事案に対応するためにも、利便性だけで使用するのはなく使用する上で注意すべきことは何か、本当にこの情報を信じていいのかなどを考えていくことが、これからとても大切になってくると思います。

他にも、現代社会では少子高齢化の問題や、介護問題など、たくさんの課題があると思ひます。高齢者の問題は自分たちには関係ないと考へるのではなくて、未来に向けて、誰もが過ごしやすい社会にするためにはどうしたらいいか。自分には何ができるかを考へていくことが、よりよい社会をつくっていくために大切なことだと私は考へます。私自身も困っている人がいるのを見かけたら誰かが声をかけるだらう、自分じゃなくてもいいだらう、と考へず自分から積極的に声をかけに行ったり、助けてあげるなど自分にできることを見つけ、誰もが過ごしやすい社会になっていけばいいと思ひます。

一人の女の子

呉市立横路中学校一年

あおもと
青本

ひな
陽楠

私の友達には可愛い物よりかっこいい物が好きな女の子がいます。その女の子と出会い、私は差別の問題について考えるようになりました。

彼女と出会ったころの私は「女の子は可愛い物が好き」それが当たり前だと考えていたので、かっこいい物が好きだとわかったときは、びっくりしたし、変な子だとも思いました。だから私は、「女の子は可愛い物が好きじゃないの？」と言うと、「女の子全員がそうとはかぎらないよ。人によって好きな物は変わるからね。」と彼女は言いました。それもそうだとは思ったけれど、やっぱり納得できませんでした。

ある日、公園で彼女を見つけたので、近くに行ってみると、「かっこいい物が好きとか、女の子のくせに変なの。」という声が聞こえてきました。

彼女の好きな物を、同じクラスの女の子たちに否定されていたのです。しかし、私も同じ気持ちだったので止めに入ることができませんでした。それから彼女は、だんだん外に出ることが少なくなつて、姿を表すことがなくなつてしまいました。大丈夫かなとは思いつつも、彼女に会いに行こうとはしませんでした。なんだか会いに行くのが気まずかつたからです。

それから数ヶ月たち、私はかみの毛が長くなったので、かみの毛を切りに行きました。特に今年は暑いからと、かなり短かめに切ってもらいました。これは切りすぎたかなと思いましたが、すずしくなっ

たので、これはこれでいいなと思っていました。私は、遊ぼうと思いい公園へ向かいました。そこには友達がいいたので、一緒に遊ぼうと声をかけました。すると、みんな私のかみの短さにびつくりして、

「男の子みたい。」と言われました。私は、「そう？」とその時は笑いましたが、だんだん「女の子のくせに。」などの自分のかみの毛の短さを否定するような言葉が出てくるようになりました。私は内心、『女の子だからかみの毛を短くしたらいけないの。意味がわからない。別に自分がこの短さにしたかったからしたのに、なんで否定されなきゃいけないの。』などと思っていました。

そのとき、ふと彼女の姿が頭に浮かびました。私はこのときやっとな彼女の気持ちを納得することができました。好きな物は人それぞれ違うということや、自分の好きなこと、好きで行ったことを否定されることがどんなに悲しいことで、どんなにつらいことか理解することができました。

次の日、私は彼女の家へ行き彼女の気持ち理解できたこと、男の子はこうで女の子はこうと決めつけてはいけないこと、彼女の好きな物を否定されているのにそれを止められなかったことへの謝罪などを伝えました。彼女は「私の気持ちかわかってくれてうれしい。」と言ってくれました。

この経験から私は、男だから女だからと決めつけるのではなく、みんな平等な基本的人権の尊重の重要性や必要性を学ぶことができました。

私はこれからも基本的人権の重要性と必要性が広まり、差別問題がなくなるように自分にできることを考えて行動したいなと思います。



「らしく」とは

呉市立横路中学校三年

森本 もりもと なつみ

私は小さいころから母に「女の子らしくしなさい」「女の子なのに」「女の子なんだから」などよく言われて育ちました。多分「おしとやかにしなさい」とか「細かい気遣いができるように」さらには「掃除や片付けをちゃんとするように」といった意味で言われていて、母も私のことを思っていてくれていると思います。以前は、このことを変だと感じることはありませんでしたが、社会全体の考え方の変化や、小中学校で道徳の授業などの教育を受ける中で、これらのことを少し変だと思い始めました。

現在の私は「人は生まれながらの性別にとらわれることなく、それぞれの個性を尊重し合うことが必要」であると考えています。はたして私たちは、女の子「らしく」や男の子「らしく」あるべきなのでしょうか。

皆さんは、アニメの「サザエさん」のことを知っていますか。私は、昭和という時代の良い感じを残しつつ、明るく楽しく温かく、仲の良いサザエさん一家が大好きで、小さいころからいつも楽しみに見ていました。そんな私が大好きな「サザエさん」のエピソードを三つ紹介し、アニメの時代背景であり、母が育った昭和と現代との考え方の違いを感じながら、母が言う「らしく」について考えてみたいと思います。

一つ目は「タラちゃんが転んで泣いているのを見たサザエさんが、タラちゃんに向かって『男の子だ

から泣かないの』と言っていること」です。小さい子が転んで、その痛みで泣くのはよくあることです。私も小さいころ、多く経験したように思います。でも、その時になぜ「男の子だから泣いてはいけない」のかということ。本当だったら男女問わず、痛みに強い子や弱い子、そして、よく泣く子やあまり泣かない子がいるのが普通であると思います。いつまでも泣いていても何も解決しないことをタラちゃんに教えるのであれば「泣かないの」だけで良いと思います。

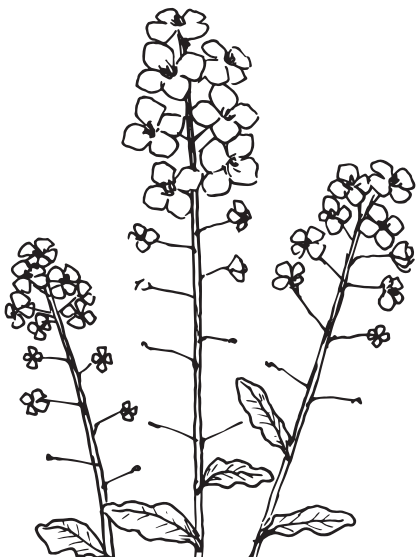
二つ目は「サザエさんが、タラちゃんに赤色の服を着せようとしたところ嫌がり『赤は女の子の色だとリカちゃんが言っている』と言っていること」です。人にはそれぞれ個性というものがあり、好みの色も当然それぞれです。男性が着用する色、女性が着用する色というものが存在して良いはずがありません。

三つ目は「登場する女性たちがみんなスカートを着用していること」です。現代であれば女性も普通にズボンを着用しています。そして私の中学校では、女子生徒でも普通にズボンを着用しています。「女性はスカートを着用すべき」と発言しているわけではありませんが、現代の感覚で言えばやはりおかしく感じると思います。

これらのエピソードについて、皆さんはどのように感じましたか。もしかするとよく思わない方もいるかもしれませんが。しかし、これらはすべてテレビで放送されたことから分かる通り、少し前の時代、きつと、母が過ごした昭和においてはよくある一般的な考え方であったことと思います。特に二つ目のエピソードは、小さい子どもであるリカちゃんの発言ということもあり、まさにそれが当時の「普通の感覚」であり、男女がはつきりと区別、区分されてきた日本の歴史、そして、日本の文化によるものであるとも言えると思います。このように考えてみると「らしく」についても、母と私との間に考え方の大きな違いがあることもしょうがないことなのかもしれません。

それでは、母がよく使うこの「らしく」という考え方は、現代においては「いけないこと」なのかと言うことについて考えてみたいと思います。これについては私個人の考えですが、確かに性別によって「そうあるべき」「それが当たり前」という意味においてよくない表現であることは間違いないことだと思います。

現代は、多様性が尊重される時代です。性別により「らしく」あることが求められる時代ではありません。もっと自由に生きて良い時代です。日本は世界の他の国に比べてジェンダー問題などにおいて遅れているとよく聞きます。私のこれからの人生では、性別による「らしく」を求められることもあるかもしれませんが、ですが私はそれに負けることなく、同じ「らしく」でも「自分らしく」を実践していきたいと思います。



平和のおりの中の自分

呉市立阿賀中学校二年

松本^{まつもと} 愛生^{めい}

現在、世界の各地では戦争・貧こん・人種差別など、相手をかえりみない自己満足・利己主義・人間のネガティブな感情によって人間が人間を傷つけ合っていると思います。優位に立つ者と、それを見て見ぬふりをする者が平和に暮らしている世界です。それを感じながらも、私も最近ではテレビで戦争の残酷な映像が映ると、途中でチャンネルをかえ、日本のおもしろい番組に逃げて、同じ地球の中でおきている戦争などに見て見ぬふりをして、平和な日本に逃げています。

この現状は、私のクラスの中、私の現在の環境と全く同じ、世界の縮図が私の世界です。

私のせまい世界の中では、テレビのように目に見えた差別はありません。しかし、目に見えない境界線があったり、理由のない仲間はすぐがあります。そして、私はその現状の中にいるのに助けようとせず、平和のおりの中で自分の感情を殺して生活しているのです。

私の通っている中学校には、ハートルームというクラスがあつて、数学と国語は別に授業をうけています。その他の科目は一緒ですが、クラスのみんなは、ハートルームに行っている子とはあまり関わろうとしません。口には出さない目に見えない境界線があるのです。そのことに私は、いつももやもやしています。幼稚園のころは、みんなで遊んでいたのに成長するにしたがつて、関わりなくなりました。

私の妹は重度の食物アレルギーがあり、給食も食べられず、毎日お弁当を食べています。教室で一人だけお弁当を食べるのでクラスの子から、からかわれたりつらい時期もありました。しかし、クラスのみな

んなに病状を理解してもらい、妹の病状を理解し、思いやりのある配りよをしてくれる友人の中、妹の気持ちは前向きになり、現在はやさしい友人と共に楽しく学校へ通っています。

このことから、私は発達障害などの疾病についてくわしく知らないし、私のクラスの子のしょう状を知りません。クラスの境界線をなくすためには、私達が知識を深め、相手がどんな状況なのかを知るから始まり、お互いのおもしろいところを見つけ、尊重しあえたらいいなと思います。

そして、理由のない仲間外れです。私の世界には色んな仲間はずれがあつて、仲間意識を高めるために一人を仲間はずれにするタイプや、嫌いだから仲間はずれにするタイプやいろいろなパターンがあります。仲間外れにする側になれば平和です。誰かを落とし入れて、自分は優位な立場を保とうとする行為は、戦争や、人種差別などと根本的な心理は同じものだと思います。私の小さな世界にも戦争・人種差別が起こっているのです。

私は、人間は弱く、おろかな生き物であるけれど、お互いを知り、お互いを認め合い、そこから楽しい世界になると思います。そのために私はまず、いろいろな知識を深め、自分をみがき、相手の痛みのわかる人間になりたいと思いました。



「自分と人権」

呉市立宮原中学校二年

杉田 すぎた

祐輝 ゆうき

私は木です。何百年も人や動物の歴史や進化をみてきました。自然の植物として動物たちの栄養として生きています。私の寿命はとても長いですが、私は植物、動物たちのように自由に動くことができません。しかし、私が動かないおかげで動物たちも私の葉っぱなどを食べて生きています。

動物たちは弱肉強食というきびしい世界で生きています。行きたいところに行くことができる命がなくてもうらやましいです。もし私が自由に地面を動けるのであれば、自分の大切なものもみつかるかもしれません。

ですが、どの動物や人も見ていると、自分らしくオンリーワンのまま生きてるのが幸せに見えます。もしかしたら私たち植物が動かないのも、私たちの「オンリーワン」の生き方なのかもしれません。

しかし、私も自由に動いて私の新しい生き方を見つけないです。もつといろいろな世界を見ていきたいです。

これはぼくが、国語の授業「変わり身の上話」という単元で作った時の文章です。この時ぼくは、自分を木に置き換えていたのかもしれませんが。

「人権」という意味を調べてみると、「誰もが生まれながらにして持っている、人間として幸せに生きていくための権利」となり、なんだか難しく思いました。

今、ぼくは中学二年生で、毎日の生活が楽しいときもあれば、正直行くのが面倒だと思う朝もあり

ます。本当はこうしたいのに、こうなりたいのにと思う気持ちと戦っています。

文章の中の「木」も現状の自分を受け入れつつも、本当はこうしたいんだけどな、という姿との間で少々かつとうしています。さらに「木」は、自分がそのままの姿で存在することによる他生物との関わりを通して自分の価値を見い出しています。

ぼくはどうだろう？ 中学二年生という立場でどんな毎日を送ることで幸せや意味があるのだろうか？

中学生は少しきゅうくつな時もあるけど、まだ日本では働く必要がなく、「学ぶ」という権利が与えられています。そして若いので体力もあります。「木」と違って活発に動くこともできます。

たまに親に「中学生らしく」と言われます。多分それは勉強をがんばって運動もして、いきいきしてほしいという意味だと思います。

だけどぼくにとつて勉強はあまり居心地のいいものではありません。運動に熱くなるタイプでもありません。

ぼくは絵を描いたり、作品で表現したりすることが好きです。運動するより毎日趣味に没頭していたいです。

活発な同級生を見ると、明るく眩しいなと思います。ぼくに何か足りないのかなと思ってしまうこともあります。

しかしこれがあるのままのぼくで、これがぼくのオンリーワンです。

人権が認められる世の中とは、そんな小さな個人の思いと他者との違いを理解しつつも、それでも自分を自分として認められる毎日を送れることだと思います。

ただ一つ、身の上話から一つ話題があります。それはいつかぼくが存在することによって、人が喜んでくれたり同じ気持ちの人を安心させる存在になるということです。

そんな将来を迎えたいです。

一人で悩まないで

呉市立昭和中学校三年

塚原つかはら

唯ゆい

最近、ニュースでよく見かけるのが、学生の間で起こるいじめ。文部科学省の調査によるといじめの認知件数は、前年度が五一七・一六三件であり、今年度が六一・五三五一件と、前年より一九%増加しているそうです。

ではなぜ、いじめは起きるのでしょうか？

文部科学省「いじめの問題に対する対策」「いじめの定義」の調査によると、いじめは子どもの環境的なストレスで起こるそうです。不満やストレスが多い環境は、それだけで子どもを攻撃的にしてしまい、そのはげ口を他者へと向けてしまった結果いじめへと繋がります。また、相手と自分との価値観の違いや、容姿などの妬みなどいじめの原因になりうると私は感じました。

実際に、私の友達でいじめを受けたことがある子がいます。その子は、友達に陰口を言われたと私に相談してきました。この話を聞いて、陰口を言われただけじゃないか、と思った人もいるかもしれませんが。しかし、言われた方は心に一生癒えない傷を負います。その子は、先生を通した話しあいで無事解決しましたが、先生や友達に相談できない人は不登校、最悪の場合、自殺に追い込まれる可能性もあります。

いじめ防止に対する取り組みでよくあるのが、「いじめ標語を作ろう」やいじめ撲滅のために挨拶をしよう、という取り組みです。とても素晴らしい取り組みだと思いますが、この活動で本当にいじめが減っているのかと考えると、そうではないと私は感じました。かといって、私自身も、いじめ防止のた

めに具体的な案をだせるわけではありません。しかし、いじめが起こったとき、必ずしなければいけないと思っれていることがあります。

それは誰かに相談することです。

家族、友達、学校や習い事の先生……。私達の周りには、自分が思っているよりも相談にのってくれる人はたくさんいます。また、SNSが発達してきた今の時代は、SNS上で繋がっている人に話を聞いてもらおうという手もあります。どうしても周りの人に相談できないという人は、いじめ相談窓口に電話して話を聞いてもらおうこともできます。

このような方法を通して、自分以外の誰かに相談して話を聞いてもらうことで心のモヤモヤがなくなり、気持ち軽くなると思います。今まで誰かに相談したことがない、という人も、勇気をだして一歩、踏み出してほしいです。そうすると、これまでとは違った景色が見えてくるかもしれません。

私自身も今、学校や友達との間で嫌なことがあったり、悩み事があったりすると家族や塾の先生に相談しています。私は誰かに相談することは、自身が成長するうえで大切なことだと考えています。例えば、家族に友達のことや悩んでいることを相談すると、色々なアドバイスをくれます。そのアドバイスは、ただその友達に対して言うのではなく、自分に足りなかったところについても指摘してくれます。そのおかげで、次、同じことが起こったとき自分が冷静に考えることができます。また、塾の先生に初めて相談したとき、その相談を真摯に聞いてくれた先生とは今、相談以外のこともたくさん話すようになりました。

このように、誰かに相談することは自分の心を軽くすると同時に自身を成長させ、今まで話したことがなかった人と仲良くなるきっかけにもなります。今、一人で悩んでいる人は、相談することが迷惑だなんて思わないでほしいです。相談を通して、誰かの心が一つでも多く救われますように……。

多様性について

呉市立昭和中学校三年

橋本 はしもと

亜美 あみ

「LGBT」という言葉を聞いたことはあるだろうか。「LGBT」とは、レズビアン、ゲイ、バイセクシャル、トランスジェンダーの各英語の頭文字を組み合わせた表現で、性的少数者（セクシャルマイノリティ）を表す言葉の一つとして使われる。このような性的少数者は、差別の対象となることが多い。

少し前までは、男女の恋愛だけが当たり前であった。しかし、現在では世界でLGBTについての理解が進んでいる。例えば、台湾では同性婚が認められており、約一年間で四千組のカップルが結婚しており、多くの人々の願いが叶っている。また、イギリスやドイツなどでは、性自認によって戸籍上の性別を変更できる。日本でも、「性同一性障害特例法」により、性別の変更ができるようになってきているが、性別適合手術を済ませていることや、婚姻をしておらず、二十歳未満の子どもがいけないこと、などのさまざまな条件がある。

世界ではこのようなさまざまな取り組みがされているが、まだまだ見えないところで差別に苦しんでいる性的少数者がまだまだたくさんいると私は考える。ニュースやインターネット上では「生き方は人それぞれなので、非難するのは良くないと思っっている」という声はあるものの、大半をしめているのは「周りにいないから印象がうすい」や「よく分からないし、そういう人たちのことは理解し難い」という声であった。

では、性的少数者はどのように思っているのだろうか。実際に調べてみると、「書類等の性別欄に毎回ストレスを感じる」や「LGBTであることをカミングアウトをすると、友人の大半が自分のもとを離れてしまつて辛かった」という声があった。もちろん、全員が苦しんでいるというわけではないが、やはり、苦しんでいる人が多いというのが現状である。実は、私の友人の中で同性愛者の女性がいる。正直に言うと、初めてそのことを知ったときはものすごく驚いた。こんな身近に性的少数者がいると思っていなかったからだ。

しかし、彼女の投稿を見てみると、私たちと何も変わらないんだな、と思った。そこには、よくSNSで見かけるような幸せそうな惚気話やトーク画面が投稿されていた。たとえ同性愛者だとしても私たちと同じように恋で悩み、悩まされているんだと、気づくことができた。私も同性愛者だからといって対応を変えろということとは行っていない。今でも普通に遊ぶし、会話をしている。実際に同性愛者の彼女と出会ったこの経験は、私にとって忘れられない出来事となつたし、自分なりの考えを持つことができた。

「理解者になろうとする前に、自分だつたらどうか想像してみることに」。これは、とある芸能人の方の言葉である。私はこの言葉を目にして、強い印象を受けた。理解するばかりではなく、自分ももしLGBTに当てはまっていたら周りにどのような理解してほしいか。視点を変えて想像してみると、自分が欲しいことを周りにしてあげればいいんだ、という答えに気付くことができた。まずは、「話してくれてありがとう」と伝えるのが良いと思つた。個人の感想を伝えるより先に、そういう人もいるんだと理解することが大切なんだと記事を調べていくうちに分かつた。

人の「普通」は誰かの「普通」ではない。LGBTについて理解することは強制ではないが、そういう人もいると頭のすみに置いておくのが、私は大切だと思う。「男がスカートをはくのはおかしい」

「気持ち悪い」「同性愛なんて気持ち悪い」。これらの言葉は、全て誰かを傷つけていることを分かってほしい。私たちは一人一人違う人間であり、誰一人として同じ人なんていない。しかし、私たちはお互いを支え合うことで生きている。今、この世界で性的少数者がいることは決しておかしいことではない。ごく自然で当たり前のことなのだ。

今や十三人に一人と言われているLGBT。周りを見渡せば言い出せないだけで、本当はいるかもしれない。まずは、LGBTについて理解してみるのはどうだろうか。全ての人が過ごしやすい世界になればいいな、と私は思う。



言葉の重み

呉市立倉橋中学校九年

野田のだ純じゅん

「本当にこれでいいかな。」

私が友達とスマホでやりとりをする時、送信する前に心に問いかける言葉だ。一度自分が打った文章を見て、きちんと相手に伝わるのか、誤解を生むような文章になっていないか確認してからゆっくりと送信ボタンを押す。私が今まで一度もSNSで友達と大きなトラブルになったことがないのは、この言葉のおかげなのかもしれない。

物心がついたときからデジタル技術が発達しており、インターネットやオンラインの世界に慣れ親しんできた私たちZ世代にとって、スマホやパソコンは必要不可欠なものになっている。

私自身も中学一年生のころにスマホを買ってもらい、今では生活する上で手離すことができない存在になっている。友達とたわいもないやりとりができる便利なものである反面、誤解を招く文章で友達関係が壊れたり、悪口などを書いていじめに発展するといったトラブルも数多く起こっている。スマホを使う上での正しい知識、向き合い方、相手への気持ちを心に留めておけば、きっとこのようなトラブルはなくなっていくはずだ。

だから、学校で定期的にスマホ教室が開かれて正しい知識を身に付けたり、道徳の授業でインターネットでのトラブルの事例を挙げて再度、相手の気持ちを考える場を設けたりしているのだと思う。

インターネットのトラブルで子どもに焦点を当てられることが多いが、大人にもトラブルがあること

を忘れてはいけない。それは誹謗中傷だ。

インターネットでは、自分の顔や名前が分からないように発信ができる。近年は、インターネット上に確かでない情報に基づいて、トラブルに関係するような人の個人情報を書き込みされたり、悪口や嫌がらせの書き込みをされる事例がある。

一度インターネット上に書き込んだ情報は、すぐに拡散する。もちろん、書き込みされた人の人権は侵害されてしまい、書き込んだ人も名誉毀損などの罪に問われることもある。

私は、よくスマホでニュースや芸能・スポーツといった記事や動画のコメント欄を見る。正当なコメントや賞賛し褒め称えるコメントは、見ていて心が温かくなる。

しかし、その温かさは一瞬で消える。前向きなコメントがたとえ百個あったとしても、相手をバカにするようなたったひとつのコメントの方が心に残る。

言葉は、使い方を間違えればナイフなどの凶器になるというが、ナイフなど比にならないくらい鋭く深く心をえぐってくるものだ。私が言われた訳ではないのに、そのコメント一つで心がズキッと痛んだ。

どうして会ったことも話したこともない人を平気で叩けるのだろうか。SNSの向こう側にいるのは、自分と同じ一人の人間であることに変わりはない。自分が同じことを言われたらどう思うのか、投稿する前にじっくりと考える必要がある。知らず知らずのうちに他人を傷つけているのかもしれないと思うと、スマホが恐ろしくなる。

スマホも言葉も決して誰かを傷つけるためにあるわけではない。言葉で誰かと喜びを分かち合ったり命を救うためにあるものだ。

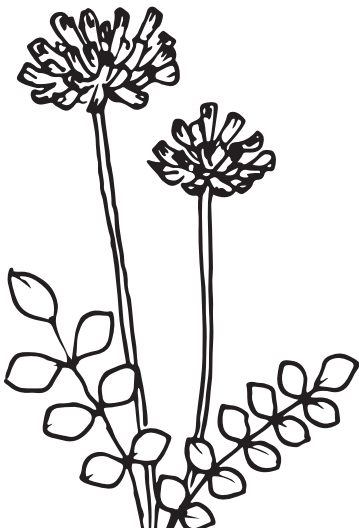
もう一度、言葉の重みを理解して、守られるべき人権について考え、自分を見つめ直す機会にした

い。誹謗中傷は言葉の人権侵害である。

言葉は、私たち人間が操って使っている。ということとは、言葉を慎重に選んで使えば、誹謗中傷は決して起きない。言葉に対する一人ひとりの向き合い方で誹謗中傷はなくなると思う。私は言葉について深く考えていくうちに、ある法則を思いついた。

「言葉が変われば、心が変わる。心が変われば行動が変わる。行動が変われば人生が変わる。」
言葉は自分を表している。自分を変える第一歩は言葉なのだ。言葉が変われば、自然と相手の気持ちを考えることができるようになる。相手の気持ちを考えられたら、相手に寄りそう発言ができたり行動に移したりできる。そうして人間関係が築かれ、人生がより豊かになっていく。この法則を胸に私は普段からの言葉遣いに気をつけたい。

世界中が愛のあふれる言葉でいっぱいになりますように。



“しか”ではなく“も”を指摘して

江田島市立江田島中学校一年

田口 たぐち はるか

皆さんは、「LGBT」を知っているだろうか。LGBTとは、レズビアン・ゲイ・バイセクシュアルの三つの性的指向と、トランスジェンダーの頭文字を組み合わせた頭字語であり、性的少数者を包括的に指す総称のことだそう。私もつい最近まではこのような言葉があるとは知らなかった。LGBTの人達と関わるには、お互いに相手を尊重し、理解し合うことが大切だ。しかし、それができず、「認められない」という考えを持つ人達も存在する。そのような人達について、私は父と話し合ってみたことがある。

ちょうど、LGBTに関係するテレビ番組を見ていた時だ。差別されたことのある人や同性愛者の人達がインタビューを受けていた。私は、「そこまで差別されるようなことだろうか。迷惑を掛けているわけでもないのに。」と考えていた。しかし、父の意見は違った。父はその人達が認められなかったよ。うだが、批判的な言葉を使うわけでもなく、こう言った。

「全ての人を認めるのなら、認められない」という意見を持つ人達も認めなければいけないんじゃないかな。」

その言葉を聞いた時、衝撃が走ったような気がした。今まで私は、全員が認める必要があると思っていて、そんな考え方ができるなんて思ってもみなかった。今思えば、普段からこのような問題以外でも、私達はAという考えを認めるか認めないかという二択の質問を迫られ、「これこそが正しい」とい

う一方に無理やり考え方を誘導されているのではないだろうか。これは、本当に多様性のある社会につながるのだろうか。例えば、今「認められない」という意見を持っている人達が、逆に認められないという世の中になつたらどうだろう。それは、新しい差別の種を生み出してしまっただけではないだろうか。もちろん、批判や差別を方がいいというわけではない。批判や差別は相手の心を深く傷つける、絶対にやってはいけないことだ。しかし、自分なりの考えを自分の中で持つておくことは、自由なのではないだろうかと思ふ。私は、父との話し合いの中で、白か黒かという二択ではなく、その間にある意見も柔軟に認めることが大切だと気付いた。薄い灰色から濃い灰色まで、白と黒の間と言っても、その間には様々な色があるだろう。それらも全て受け止めることが、多様性のある社会につながる第一歩だろう。そこから皆が気持ち良く、真の意味で平等になれる社会を目指していくべきなのではないだろうか。

以上のことに気づき、私は、これを実現するために、話し合いの機会を積極的に設けることが大切だと思ふ。そうすることで、より平和的に、自分の考えが伝えやすくなる環境が作れるようになることだろう。

今まで書いたことは、「個を大切にする」という、これまで私が学校や家で学び続けてきた生き方と同じである。このようなことをするには、「何か特別なことをする必要がある」と身構えなくてもいいのではないだろうかと思ふ。私達が個を大切にして生きていくために必要なことは、より一層人の声に耳を傾けることのできる心のゆとりとともに、答えを見つけようとする共生の心を育てていくことだろう。これが、私達が多様性のある社会を作っていくことにもつながり、人生を更に豊かに広げていくことにもなるのではないだろうか。これから、私は、誰もが平等で多様性のある社会を目指して、心のゆとりを持つことと、共生の心を育てることを実践していこうと思ふ。

女性が輝く未来へ

江田島市立江田島中学校三年

山下 やました
萌唯 めい

日本の女性は、昭和二十一年まで選挙権がなく、参政権が認められなかった。明治五年に学制という学校に関する制度が発布されたときも「男女関係なく、学業にはげむことができる」と説かれていたが、実際には「女性に教育は要らない」とされ、女性の不就学が多かった。現在は、これらの問題は解決されている。しかし、今もなお「男性は仕事、女性は家事」というイメージは根強く残っているのではないだろうか。

二〇一六年に「女性活躍推進法」という、働く女性を後押しする法律が施行され、女性の活躍できるような社会を目指そうという動きが開始された。

そんな中、私は、あるニュースを目にした。東京医科大学が入学試験において、女性受験生を一律減点していたという事件だ。二〇〇六年から行われており、一般入試だけではなく推薦入試や地域入試でも点数の操作があったそうだ。今も昔のように、女性は不利な扱いを受けているのかと驚いた。これから女性の活躍できる社会を目指し始めたのに、大学でその場を奪われてしまうのかと悲しい気持ちになった。この事件が起ってしまった原因は何なのか。女性医師は、出産や子育てにより離職、休職するケースが多い。たとえ仕事に復帰したとしても、保育園や幼稚園の送り迎えなど、子どもがある程度大きくなるまでは、普通の医師たちのように遅い時間まで働くことができない。つまり、子育てをしながら働くことができないことが、女性と男性に働き方の格差ができてしまう原因だと思う。

その一方で、女性が子育てをしながら、仕事を両立できている国もある。例えばアイスランドだ。ア

イスラランドでは、女性が職場に赤ん坊を連れて行くことは当たり前なのだそう。また、父親専用の育児休暇があり、父親と母親共同で育児に専念できる環境が整っている。日本でも、男性の育児休暇制度があるが、大企業にしか浸透していない。一部の中小企業では、休暇中の人手が足りなくなってしまうため、制度を取り入れないこともある。また、育児休暇の取得者の割合は、女性は約九割、男性は約三割と世界に比べて男性の割合が低くなっている。男性の育児休暇の期間は一週間程度が多く、女性に育児の負担がかかってしまう。

どうすれば、少しでも負担を減らすことができるのだろうか。私の家では、母と父で家事を分担している。母は食事やそうじ、洗濯。父は皿洗い。私は食事の用意をしている。一つの家事を分担することで、母の負担は減らすことができる。また、家事をすることで、子どもとの交流ができたり、よりよい家族関係を築くことができると思う。

現在、重要視されている、女性の活躍推進。日本では、保育園、幼稚園の時間帯延長や、放課後児童クラブという小学生のための学童保育がある。学童保育などにあずけることで、親が不在で不安になりながら留守番するよりも、友だちと過ごしている方が子どもにとっても良い経験になるし、親も安心して働くことができる。とても良い施設だと思う。今後も家庭での子育てが基本だと思うが、国や地方公共団体、地域、企業、学校、社会教育施設などが協力して社会をつくっていくことが大切だと思う。社会の中で託児所などをつくり、子育てしながら働き続けることのできる環境整備など、まだ様々な活動ができると思う。

国の制度や政策はすぐには変わらないかもしれない。しかし女性への負担は軽減できると思う。例えばごみ出し、皿洗い。そんなささいなことでも楽になるのだ。十年後、二十年後の社会が「男性は仕事、女性は家事」と決めつけのない世の中になり、女性も男性もそれぞれが活躍できることを願っている。

私が知らない世界

江田島市立能美中学校二年

前田まえだ彩笑さいえ

私は、外国から日本に旅行に来た方と会って、英語でお話をする英語教室に通っています。生徒は私をふくめて二人で、私以外の生徒さんは、私と小さいころから仲がよく、お互いのことをよく理解しあっている友達です。英語教室の先生は、「ウーフ」という「お金のやりとりなしで、『食事、宿泊場所』と『力』そして『知識、経験』を交換」をコンセプトとしているサイトで、自分達の生活や家、身近にある自慢などを発信し、「実際に来たい。」という外国の方を受け入れていきます。外国の方の出身国はさまざまで、アメリカやイギリス、デンマークやフランスなど、色々な人がやってきました。

私は、その英語教室に小学四年生から通っているのですが、学校で習った質問のしかた、単語、自己紹介のしかたなどを、はじめて会った人たちに向けて話すのが初めは楽しくてしかたなかったです。しかし、中学生になり、「なんで外国の人と話すのか。」と思うようになりました。いつからか、英語教室に行きたくないという思いをずっと引きずったまま、中学二年生になりました。

ある英語教室の時間に、フランスから日本に旅行に来たテオくんというゲストと一緒にお話をしました。

テオくんのご両親は、ケーキ屋だそうで、私達のために、テオくんがケーキを作ろうとはりきっていました。しかし、私は卵を体が受けつけず、卵が食べられません。ケーキには卵が入っているので、私は食べられないことが分かっていたいながら、なかなか言い出せませんでした。そんな様子に気づいたもう

一人の生徒さんが、テオくんと英語の先生に説明してくれました。テオくんが、がっかりするだろうと、とても心配したけど、テオくんは「OK、OK。」と笑いかけてくれました。その時、私は、言葉が通じなくても、国がちがっても、人を尊重し、大切にすることは同じだと実感しました。私を受け入れてくれたテオくんにも、気づいてくれた生徒さんにも、とても感謝しています。そのあと、みんなで卵が入っていないココアケーキを、テオくんにも日本語を教えてあげながら一緒に作りました。

作ったあと、みんなで英語でお話をしました。私は、新しい発見や、はじめて知った外国の文化を知って、テオくんと話して、とても楽しかったです。小学校のころよりも英語が話せるようになっていするため、小学校のころよりも、英語の会話が楽しめたと思います。

今まで「なんで外国の人と話すのか。」と思っていたのですが、私ははじめて自分なりの答えが見つかり、心から「楽しい」と思えました。その答えとは「自分が知らない世界を知る。」ためです。あたりまえ、と思うかもしれませんが、日本にはない文化や、新しい発見をするのに、英語を勉強し、交流していくのだと思います。

現在、外国人に対する人権問題がおきていると聞きました。生活習慣、肌の色、言葉、宗教などの違いから、様々な軋轢が生まれ、「外国人」に対する偏見、差別ができあがってしまうそうです。私は、それらの違いは、生まれた場所だけの違いだと思いましたが、どんな人にも良いところ、悪いところ、違いがあります。でも、真剣に向き合って、話をするだけで、その人に対する見方がかわりはじめるかもしれません。

皆さんは、このような人権問題についてどう考えますか。

今回、英語教室のことから、人権について考えました。このことを考えさせてくれたのは、日本語が違ったわらなくて、生活習慣も文化も違う、テオくんです。



あとがき

法務省と全国人権擁護委員連合会では、人権尊重の普及と高揚を図るため、啓発活動の一環として、昭和五十六年度から、次代を担う中学生を対象とした「全国中学生人権作文コンテスト」を実施しており、本年度は四十二回目になります。

広島法務局呉支局及び呉人権擁護委員協議会においても、呉地区大会を実施したところ、呉市・江田島の各中学校の御協力により、二十七校、千八百七編の応募がありました。一編一編読みながら、中学生らしい感性に富み、純粋な感覚で人権問題をとらえていることに感動を覚え、生徒の真摯な姿勢に心打たれました。

作品には、日々の生活の中で出会った体験や、互いに話し合ったり、社会の情勢をしつかりと見つめた上で自分の考えが記されており、「女性」「高齢者」「障害のある人」「性的マイノリティ」「戦争や平和」等々、幅広く、中学生が豊かな人権感覚を身に付けていることに頼もしさを感じました。

この作文集をより多くの方々に御愛読いただき、これからもっといろいろなことに出会うであろう中学生の背中を押していただき、人権尊重の輪が更に大きく広がることを願っています。

おわりに、人権作文の応募に当たって御指導いただきました各中学校の先生方、さらに審査に多大な御指導御協力をいただきました、中国新聞社呉支社、呉市教育委員会及び江田島市教育委員会に心より感謝申し上げます。ありがとうございます。

令和五年十二月

広島法務局 呉支局
呉人権擁護委員協議会

第42回(令和5年度)全国中学生人権作文コンテスト呉地区大会表彰作品

○最優秀賞1編 ○優秀特別賞4編 (以上5編県大会推薦) ○優秀賞17編 ○奨励賞8編

審査会 令和5年10月5日(木) 表彰式 令和5年12月3日(日) 会場 呉信用金庫ホール

学校名	学年	生徒名	作品名	表彰
能美中学校	2	おざき 尾崎 愛心	思いやりのある優しい未来のために	最優秀賞
仁方中学校	2	みやち 宮地 かな 柑奈	すれ違う視点	優秀特別賞
阿賀中学校	2	なかむら 中村 まどか 円香	自分らしさ	優秀特別賞
両城中学校	3	ながしげ 長重 かな 佳奈	見えづらい差別に目を向けて	優秀特別賞
倉橋中学校	9	いしじ 石地 彩乃 紗りな 捺	かわいい手	優秀特別賞
広南中学校	1	いずみ 泉 じゅん 潤	いじめってどこから?	優秀賞
広南中学校	1	かわもと 河本 ゆり 悠里	言葉のちから	優秀賞
広南中学校	3	おおはし 大橋 ことこ 琴子	言葉に込めて	優秀賞
白岳中学校	3	いとう 井東 ひかり 日花梨	第一歩	優秀賞
広中央中学校	2	いの 猪野 まさ 真矢	私の挑戦	優秀賞
郷原中学校	3	どうじょう 堂城 めい 芽唯	誰もが過ごしやすい社会に	優秀賞
横路中学校	1	あおもと 青本 ひな 陽楠	一人の女の子	優秀賞
横路中学校	3	もりもと 森本 なつみ	「らしく」とは	優秀賞
阿賀中学校	2	まつもと 松本 めい 愛生	平和のおりの中の自分	優秀賞
宮原中学校	2	すぎた 杉田 ゆうき 祐輝	「自分と人権」	優秀賞
昭和中学校	3	つかはら 塚原 めい 唯	一人で悩まないで	優秀賞
昭和中学校	3	はしもと 橋本 あみ 亜美	多様性について	優秀賞
倉橋中学校	9	のだ 野田 じゅん 純	言葉の重み	優秀賞
江田島中学校	1	たぐち 田口 はるか	“しか、ではなく”も、を目指して	優秀賞
江田島中学校	3	やました 山下 めい 萌唯	女性が輝く未来へ	優秀賞
能美中学校	2	まえだ 前田 彩笑	私が知らない世界	優秀賞
大柿中学校	2	たかさき 高先 ひろと 悠斗	早めに相談することが大切	優秀賞
仁方中学校	3	しろう 蔣 よう 瑤	私のストーリー。あなたはと思う。	奨励賞
横路中学校	3	さかい 坂井 りほ 李帆	言葉のもつ力	奨励賞
宮原中学校	2	おざき 尾崎 はな	伝える前に考えて	奨励賞
呉中央中学校	2	くぼた 窪田 ぼんり 万湮	戦時下の子ども達	奨励賞
安浦中学校	3	おおもと 大本 せな 瀬奈	嫌いな兄と好きになりたい未来と	奨励賞
江田島中学校	3	やぎ 八木 ひなよ 陽奈代	貴重な体験	奨励賞
能美中学校	1	きさかわ 崎川 ももこ 桃子	男女格差のない未来へ	奨励賞
大柿中学校	1	おおにし 大西 ななみ	平等であること～障害を持つ方へ～	奨励賞

応募校数 27校 応募作品 1,807編



人権イメージキャラクター
人KENまもる君・人KENあゆみちゃん

★令和5年度啓発活動重点目標★

「誰か」のこと じゃない。

【法務省・全国人権擁護委員連合会】

令和五年度

中学生人権作文集

令和五年十一月 印刷

令和五年十二月 発行

発行者 呉市中央三丁目九―二五

広島法務局呉支局

呉人権擁護委員協議会

印刷者 広島県呉市中央三丁目六一

株式会社ハラプレックス

表紙画作者紹介

清田内匠(せいたたくみ)先生

元 呉市教育長

◎本作品集を転載又は教材等に使用される場合は
左記に御連絡ください。

広島法務局呉支局総務課

電話 〇八二三―二一―九二八八

FAX 〇八二三―二三―六〇九一



読みやすいユニバーサルデザイン
フォントを使用しています。